



ピノコパパのエッ
セイ集から



善通寺の昭和レトロ

pinokopapa

もうなくなってしまった銭湯の話です

ものの本に、善通寺の銭湯が2軒紹介されていました。大正湯 と 温泉湯 です。そして、この写真は 温泉湯 の入り口の石畳です。この路地を何度通ったでしょう。写真の建物の左側へ入っていくと男湯で、履物を下足箱に入れて気札を抜いて鍵を架け、番台で料金の払い、服を脱いで脱衣箱に納め、アルミの鍵を手首にかけて浴場に入っていく ... それが殆ど毎日のことでした。

実はここより近いところが 大正湯 でありましたが、何故か父母はこちらの方へ通っておりました。なんででしょう。一度、大正湯で、母の出てくるのを待ってた時、向いで大人たちが何やらへんなことをして遊んでいます。玉突き だったんですね。ビリヤードです。入り口から一段高いところに台があり、棒を構えて突くと、軽快な音がします。そして煙草を啜え、白いカッターシャツを腕まくりした男の人が楽しげにものを言い、台を回ってまた突きます。もう少し経って見た日活の映画の一シーンのようでしたが、そのころなんて、そんなこと分かりませんので、好奇心が疼いたのでしょうね、ついトコトコと入って覗いてしまいました。ちょっと怖かったんですが。 ... ボクも突いてみるか そんなふうには声を掛けられたと思います。母でしたか、父でしたか、分かりませんが、何も言わず抱き上げて連れ出され、あんなところに入ったらいかん！と叱られました。別に怖いことなかったのにと思ったのですが。以来こちらの銭湯に通うようになったと思います。



序でに、同じようなことがこの近くでありましたので、記しておきましょう。温泉湯の近所になります。表通りに芸者さんの検番がまだありました。私が中央幼稚園に通っていた頃です。白いペンキが割れて弾けていた木の棧を打ちつけた窓の横に入り口がいつも開いており、私はここがなにををするところか、気になっておりました。そしてついつい顔を突っ込み、中を覗いて見てしまいました。向こうで着物を着た女の人が怒ったように睨み、ひょいと胡麻塩頭で着物のおじさんが、ぼん ここはぼんの来るところじゃねえよ と言ったように思います。こうして考えてみますと、怖いものしらずの、好奇心ばっかりの子供だったと思います。

軍都 善通寺の名残りです

善通寺駅を西に下がると、市役所をすぎ、郵便局の 本局 に出ます。その前にこの石碑が立っております。

輜重隊跡 とありますが、通りの建物の裏に（なにが建っていたかは定かではありませんが）明らかに兵舎と分かる建物がありました。そして、私たちは 鉄道教習所 と思っておりました。あまり人気のない建物のなかで、若い人が工員さんのような作業服をきて、 投炭訓練 を一人黙々とやっておりましたから。ご存知でしょうか。蒸気機関車の釜に満遍なく石炭を放り込む訓練です。もっとも放り込む訓練に使っていたのは、角のとれた小石ではありましたが。そして釜の蓋を、紐を引っ張って開け、一渡り済むと今度は反対側から同じように小石を投げ込みます。その人は私のような部外者

が居ても、もくもくとその訓練をやっておりました。

次にこの建物に入ったのは、私の弓道の練習で、巻き藁へ矢を射る練習ででした。この近くに弓道の師範の資格を持った人が居り、母が個人的に教えて貰えるよう頼んでくれたからです。でも私は、例え誰も使っていないとしても、私のような子供が勝手にそんなことをしてもいいのか不安でありました。私もあの教習生のように、ひとり黙々と、教えられたように弓を構え、矢を引き、巻き藁に射ち込みます。しかし何時咎められるか、不安で一杯でした。私が弓道を敬遠するようになったのは、その性でした。母には三日坊主と叱られました。

本局 へ行くと、いつもそのことを思い出します。そして弓道を続けていればよかったとも思っております。

(そして私はこの建物をこっそり探検し、二階で 銃架 の跡を見つけております。内緒ですよ。)



この歩哨舎の前に川が流れていたはずですが、今は見えません。私は 東中 に通っ

ておりましたので、毎日この前を毎日通っておりました。朝早くここに通りかかると、今はどうかは知りませんが、歩哨兵の人が、正に銃を持ってこの前で立っておりました。急に走りこむような真似をすると、撃たれるんだらうかと思ったりしましたが、さすがにそんなことはしませんでした。

この先で交通事故があったことがあります。今も学生の列に車が突っ込んできたとかのニュースがありますが、一人、撥ねられたことがあったようで、そのときの訓示に、道の端っこに避けるだけじゃなくて川に飛び込んでも避けるようにしなさい、怪我をしちゃいけません、と言われたことを今も覚えております。その通りだ、たとえ川があっても飛べば怪我しないのなら、飛べばいいと今も思って、身を守る教訓にしております。



もう朽ちてゆくばかりの建物です

商店建築と言うそうですが、町なかにこんな建物が残っています。屋根の上のペディメントが悲しいそうにみえます。この建物の横に回ると瓦葺きの屋根が隠れており、前だけ洋風ということが分かります。でも素敵じゃありませんか。東京の地下鉄浅草駅の長い通路を飾っていた葡萄の房は、日本風アールムーボーの代表のように言われておりましたが、どうなっているのでしょうか。なにか火事で焼けて無くなったとか聞きましたが。そして地方にもこんな建築があり、しかも私の住む町にも、洋風を模した建築物があったことにはっと気がつきました。しかし悲しい現状ですね。



東京から帰って、洋風建築に至極魅かれていたことがありました。そんな時、たしかサンデー毎日であったように思いますが、今のJR 丸亀駅の裏に 今記しましたアールデコのもつとアールムーポーの建物が並んであると、写真入りで紹介されておりました。ただそれが 歴史に隠された というような表現で、慨嘆した書き方の文章と共に掲載されていたと思います。鶴亀亭だったかの、三階に女の人の横顔をステンドグラスにした 遊郭 でありました。路地をはさみ、角ばつた直線を基調にした、名前は分かりませんがアールデコの 遊郭跡 もありました。高松水道局とかのように歴史遺産の扱われ方はされなくてもいいですから、そんな建物もそつと残しておいてもよかったのではないかと思つたりします。

昭和レトロの名残りです

高速インターを降りて南に向かい、西に折れると庄内線に出ます。今でもそんな呼び方をしているかどうか知りませんが、この道を作つているときから知つていますから、これでいいのでしょう。いわば善通寺のバイパスなんだと思います。ここの庄内線の中ほどにセカンドショップがあります。固有名詞を出すのはいかなものかとはおもいますが、宣伝にもなることですからいいんだと一人合点することにします。ピノキオと言います。リサイクルショップ、ピノキオです。ここは確か、近くのマンションのショールームだったところで、丸い鋼板の屋根の安普請な建物でした。ですから、ほんの間に合わせの建築で、直ぐにも壊れそうだと思つてました。それが、しばらく空き家になつてのち、ピノキオが出来たのでした。

そのピノキオに馴染むようになったのは、つい最近の事です。リサイクルショップ、ピノキオと、入り口の屋根の下に書いてあります。開店時間は朝10時から夜の10時までだったと思いますが、最近は夕方6時過ぎには閉まってることが多いようです。入り口の前には一個10円の陶器が盛り上げられており、手に取ると砂埃が付きます。他にもなんだったか気にも止まらないものが並べられていますが、中に木箱の文庫があって、これが扉を横に引いてあけるのではなく、つまみを持って扉を上を持ち上げ、下端を手前に引いて取り外すようになっています。そういえばこんな文庫箱を、時代劇で見たような気がしました。明治のものらしいです。値段は3万8千円。えっと、見返しました。0が一つ多いんじゃない？でも3万8千円でした。板が反ってゆがんでますのねえ。その後ろに並んでいる大きな鏡のドレッサーが3,000円とかだから、余計にそうおもいます。

そんな置き場の反対側が、ピノキオの広場だったか、憩いの広場だったかとお店が銘打っております休憩のできる場所になってます。一応は、と言う事にしておきましょう。休める椅子は奥のほうに二人分しかありませんので。しかし、この混乱はどうでしょう。手前に錆びて多分動かない足踏みミシンが並んでおり、反対側は台に物を載せると台から出た柱の先のゲージが上がり、そのゲージの分銅をスライドさせてゲージがことんと下がったときの目盛りがそのものの重さを示しているという、もうとても見られない計りが二台あります。広場の真ん中は古着が沢山ぶら下げてあり、体を横にしなければ奥に行けません。で、目を奥のほうに向けると、その雑然さは極まり、姫達磨やらアイヌの熊の木彫り、古看板、そして藁で縄を纏う機械が座っています。一目でわかりました。それが縄をなう機械だと言う事が。藁縄は、まず木槌で稲藁をたたいてやわらかくし、手でよじって纏うのですが、そのよじるところをこの機械がやってくれます。木の箱にシャフトとか傘歯車が組み合わさった機械は、子供の私にはとても複雑な仕掛けに見えました。手で回す、文明の利器でした。

赤と青だけのスタンドのような信号機の横を通って入り口を入ると、この節電の時期にクーラーがスーパー並みによく効いて、すずしいこと。そういえば、以前型落ち品のクーラーを買いました。中古の冷蔵庫も買いました。それからです、用もないのにこの店を覗いて歩くようになったのは。

入り口のドアを押して入ると、大混乱のカオスです。正面には何やら用途のわからぬ、キラキラとラメの入った物体が飾ってあり、思わず目を奪われてつい首をかしげてしまいます。ガラスの飾り物でしょうか。その横に びりけんさん もすわっていますし、プラスチックのモデルガンも全く無秩序に置いてあります。大昔の、握り手が白い象牙風で、上下の送受話器がキンキラキンの金メッキというつくりの電話機があり、小さな銅版作りの灯油ランプが紛れ込んでます。アニメのフィルム—こまが封入された透明のプラスチックの小板が箱の中にきちっと入れてありますが、その箱事態がラメの財布を突っ込んだ箱のに半分敷かれて置かれています。夜店で売っているものよりは、少しは増しな、ガラスかプラスチックの小片をつないだネックレスやブレスレットがぶら下がった陳列ケース、下に福助人形、熊のプーさんのぬいぐるみ、贈答品のバスタオルの詰まった箱、印刷物の色紙を入れた額、そして突然弘法大師何とかと書かれた掛け

軸数本。そんな中で私が気になるものがありました。茶道具を入れた水屋筆筒と短冊数本。茶の道具だけを入れる小筆筒はなにか特別な名前があるのかもしれませんが。短冊は茶道具を一式入れて持ち運びする細長い箱様のもので、これを見たのは何十年ぶりかでした。ああ、欲しい、と思いました。しかし、中身が欠けています。茶筌、水差し、柄杓、茶碗はあっても、建水、棗、茶杓がありません。学生時代松江で、先輩から貰った抹茶茶碗でお茶漬けを食って粋がってた者としては、一竿欲しいと思いました。しかしこれは買えない。ちょっと買えないですね。でも三本あった筌の短冊が一本なくなっていました。その整理された場所に、箱に乗った渋い夏茶碗が置いてあります。三万五千円、眼の効かない私にはちょっと手をだせない値段でした。

話が戻ってしまいますが、藁縄緋機からなにか懐かしいものを次々と思い出しました。藁縄は荒縄ですね。荒縄なんて、あまりいいイメージじゃないですが、私は実際に藁縄を作っているところを見えます。何時どこでとは思い出せないのですが。

それから米の収穫の時は、稲刈りの後稲の束を畑に組んだやぐらに懸け、そこで天日干ししてました。それが干しあがったら、筵の上で唐竿を振って脱穀します。竿で叩きます。ところが、これを効率よくできる機械が登場します。千歯こきといいました。長い櫛の歯のようなものが突き出たもので、この歯に稲を通して引っ張ると籾が落ちます。その千歯こきが改良され、足踏み式の脱穀機が出てきました。釘の先の突き出した木製の円筒を足でペダルを踏んで回し、稲の穂先を当てると脱穀されます。次にそれを唐箕にかけます。これは大きな風車を手で回して、上から落ちてくる籾からごみを吹き飛ばして選別するものです。私が小学生の低学年のときか、幼稚園の頃の事だったと思います。作業する人も、そんな新しいものを使っているのが自慢げに見えました。足で脱穀機をまわしてた若衆がおばあさんに、やってみい、というと、こわくてようせん、と答えてました。今は見ることも出来ない、その頃の最新式です。

茶器やキラキラ電話のある通路の裏側に、まさに昭和レトロの部屋があります。暗っぽくて陳列品もよく見えませんが、青色だけが残った若い若い吉永小百合のポスター、裕次郎の笑顔、美空ひばりの華やかなポーズが、ほの明かりの中に浮かんでいます。金属製の羽の扇風機、小切手の金額を打ち込む印字機、LPレコード盤、フジカシングル8、和紙を閉じて墨で書かれた出納帳に和本、タイプライター、オルガン、何もかもが無秩序に、しかし昭和のものという点で統一されて置き散らかされています。見飽きないのは何故でしょう。何も知らない若い人は、多分そんな気分にはならないのでしょうか。

すれ違おうとすると、お互いが横にならない程せまい通路です。上を見上げれば絵画の、それも大方が印刷の額がずらっと架かっています。横には、多分贈答品だったと思われる品物が並び、このあたりはただのリサイクルショップの様子です。しかし電気釜の蓋を開けると、真新しいものと使った後が歴然としているものがあります。その横に跳ね上がり式のトースター、お酒のお燗をする電気機具、ミキサー、冷蔵庫。この冷蔵庫も購入しました。掃除機もあります。しかしどう見ても何に使うのか見当もつかない電気製品もあります。前から見て横から見て、持ち上げて製品名を確かめて、それでも解らない。そんなものがあるから楽しい。向うにボストンバッグを見ながら、この前もためつすがめつ、いじくり回してきました。

家具って、最近はあまり必要がなくなりました。家に収納が最初からしつらえてありますから。しかし、私達の時代は、婚礼セットというものがあって、三点セットだの五点セットだのを持って嫁入りしたものでした。それが店半分を占領しています。これが安い。食器棚なんか、中に一杯の食器を入れて並んでいますし、本棚にまで食器が詰め込まれています。本箱を買おうと見に行くと、二千三百円というのがありました。一番下のガラス戸が一枚割れているからでした。その足元に大きな額縁が置いてあります。婦人服と試着室、その棚の上に安っぽいキンキラのバッグが、何時まで経っても同じ並びでおいてあります。しかし今日はそんなものを観察に着たのではなかったのです。

私がこういうところに来たとき、決まって捜すものが三つあります。一つは銀塩カメラ。今はもう、カメラといえばデジカメですから、普通のフィルムカメラを銀塩カメラといわなければなりません。銀塩カメラでも、無骨で重たいのがいいですね。ニコンなんか最高です。これが宇多津のリサイクルショップに沢山ありました。ボディとレンズが別々に盛り上げるように置いてありました。その一つ一つに動作保障とか動きませんとか、メモがついてます。一台千円から2万円ぐらいでした。かつての憧れが薄汚れて放り出すようにされていました。

もう一つが真空管ラジオ。スイッチを入れても、しばらく聞こえないラジオです。覗くと、木製の箱の中で、ガラスのチューブの中がオレンジ色に光出し、やっと音が出てくる。整流管、検波管、出力管、電源トランス、出力トランス、ボリューム、バリコン、スピーカー、と構造だけは勉強しました。アルミのシャーシーに真空管取り付けの穴を開け、バーコードのような模様で数値がわかる抵抗と、白い筒のコンデンサーを半田付けし、と知識だけは今でも頭の中にあります。モノラルアンプを手に入れ、電源を入れてじっと見てたこともありました。しかし、入力装置がありません。貧乏学生は考えました。イヤホーンはどうだろう。イヤホーンの耳洞に差し込む部分を取り外し、ギターのアンプに貼り付けます。弦を弾くと、ビョーンと、エレキギターのような音がスピーカーから流れました。思った通り、イヤホーンはマイクと同じ構造ですから、音を拾いました。それが一回きりの成功でした。しかし、真空管ラジオは欲しい、と思っています。自分でも、なんでそこまでの思い入れがあるのかわかりませんが、捜しています。

そして、8ミリ映写機。先ほどの、フジカシングル8という8ミリカメラで撮ったフィルムが何本か手元にあるからです。映写機を探す傍ら、スキャナーで画像なりとも取り込めないかとあがいてみましたが、無理でした。フィルムが狭くて、フィルム自体認識しません。映画として見られなくとも写真として見られたらとの思いは無駄でした。そして、このフジカの8ミリ映写機がピノキオの一番奥にありました。そのことは以前から知ってはいたのです。しかし映写機に値段が貼ってありません。ほかのとんでもなく重くてでかいビデオカメラとビデオデッキは、えっというような値段がついています。高いのではなく、安い値段だと言う事です。煙草一個に少し毛が生えたほどの値段です。そして、その値段票の下に、ディスプレイ用と赤ペンで書いてあります。動きませんよと言う事だとさっしがつきました。とは言っても値段の付いてない映写機には、とても手が出せませんでした。

しかし、妻が子供の所に行って不在のとき、思い切って買おうと出かけ、それでも迷いながらそのあたりを見てから、店員さんに声を掛けました。

んっ？

細い通路を奥の部屋まで向かい、映写機を床に置き、二人してじっと見詰めます。

んっ？電源コードと蓋がない・・・んやね。動くんかなあ、映写用のランプは点く？

すいません、うちにこれの事がわかるもんがおらんのだと思います。それで動作確認が出来なくて、値段も付いてないんだと思います。

じゃ、これはこの店のディスプレイ用？

・・・、いや、持ってかえって、ここにおいて整理するの、忘れたか放ったらかしにしてたんだと思います。

これについて聞いたのは私が初めて？

そうだと思います。

ここで無理矢理買っかえっても動かないんだ、嫁さんびっくりさせたることも出来ないんだ、そう思って、あとは黙って帰りました。もう当分ピノキオへは行けません。そして、今は口うるさい嫁さんの花嫁姿を写した8ミリフィルムは、筆筒の引き出しの中で、永久保存されて眠ったままになることが決まりました。いいんです、あの若い時の嫁さんの花嫁姿をもう一度見られなくとも。私は、つい今さっきまで昭和は手を伸ばすとそこにあって、いつでも取り戻せるもんだと思っていました。昭和はもう遠くなりすぎました。

昭和レトロのお店の話は、もう書きつくしてしまったようです。けれど二軒といったのですから、もう一軒の店名だけでもかいておきます。川田ナショナル電気店です。赤門筋の中ほどにある、確か、電気店のはずなんです、覗いてみてください。奥にペコちゃん と ナショナル坊や が立ってます。実は見た途端、ナショナル坊や の名前が直ぐに浮かんだ自分に驚いています。ペコちゃん は忘れてはしません。ゴジラ の大きな人形が左手に二体立ってますし、アトム、ウルトラマン、筋肉マン、 も忘れてはしませんが、企業宣伝の人形の名前は覚えていないと思ってました。それなのに思い出してしまいました。

人形と言いましたが、今ならキャラクターグッズとかフィギアとか言うのでしょうか。かつては 塩ビ人形 ともいってたはずですが、この言い方も私の子供達の時代の言い方でしたから、私達は人形としか言い様がありません。

・・・、キューピーさんも何体か並んでます。この店の中を巡っても電気店の看板なのに、こんな人形が並んでいます。

焼成煉瓦の塀のあるこの建物の正体を私は知りません。塀の黒板には今も法話の

一節が書かれています。皇子の森の一部となっていますが、昔は児童公園でありました。私の子供二人ともここで毎日遊んでおりました。しかし私はここがこんなに整備される前は、草だらけで人気も無いところだったことを覚えており、子供が遊んでいることに危うさを感じたりしておりました。全くの危惧ではありましたが。



善通寺 ディープゾーン

単なる石の柱です。でも、とても大事にされているでしょう。写真が明るすぎて、字が見えにくいのですが実は「日支事変・・・」と書いてあります。さすが軍都の善通寺だとは思いませんか。この石碑がどこにあるかはあえて申しません。私は子供のときから、ここにあることは知っておりました。当然ですかね。

でも町の裏側のどこかに、昔から立っております。やはり郷土の歴史の一つだとは思っております。



そしてこの場所はこの辺りの集会場になっており、昔からお祭の獅子の練習が行われておりました。ところが私自身は、親が「よそ者」で、昔からこの善通寺に住んでおりませんでしたから、太鼓敲きとかには呼ばれることはありませんでした。かんだかい鉦に合わせ、大人のたたく平太鼓と共に、男の子が太鼓をたたきます。それに乗って獅子舞が舞います。善通寺の祭りはこの獅子舞が主役です。ものの本によりますと善通寺の獅子舞は、なんと室町時代にはもう盛んに行われていたようで、現在では十二通り流し「つまり善通寺の獅子舞の舞い方を十二流としたとのことで、なかなか由緒あるものではあります。そしてその獅子舞には烏天狗が付いて歩いておられます。子供たちは「クソマーン」と口汚くからかいます。そして、全力で追いかけてくる烏天狗から、こちらも全力で逃げます。脚の遅い私も最初は恐る恐る、後には口一杯に友人達と共に罵り、からかい、必死に逃げ惑いました。獅子に付いて歩き、太鼓、敲かしてと頼んでみたりしましたが、無言で無視され、祭から無視された子供の抵抗のような気分でありました。

これはなんでしょう。知らない人は、墓石ではと言います。これが仲良く立っているのは甲山寺と言う八十八ヶ所の一つの寺の側を流れている弘田川の土手の上です。

下の写真の



左上にもこれが写っています。そして下の写真とか、次の写真とかを見れば、これが墓石とかではないことは直ぐ解ります。

このコンクリートのお堂には、注連縄が張られておりますから、これが神様だとは思いますが、他の地方とは違った形の「田の神さあー」ー田んぼの神様ではないかと思いますがいかがでしょう。四国八十八ヶ所巡りとかにお出での際は、ちょっと捜してみてください。

軍都の映画館

かつて善通寺には映画館が六館ありました。ちょっと疑われそうではありますが、映画館名を挙げてみますと、

世界館

麒麟館

富士見座

第二富士見座

オリオン座

ライオン館

でありました。富士見座 は、確か火事に遭い、建て直して名を変え、麒麟館としたとおもいます。

私の子供時代は、映画が最大の娯楽でありましたが、確かラジオも、家にありました。君の名は を寝床の中で聞いた覚えがありますから。ドラマの始まる前の、今で言う、コマーシャルソングが

カン カン カネボー カン カン カネボー

の可愛らしい歌であったこと

君の名はと 訊ねし 人 あーり

のテーマソングと言っていいのでしょうか、その歌も記憶にあります。内容は～まだよく分からず、子供には退屈で聞くのが苦痛なものでした。

映画館の話でした。

一番後に出来たのは ライオン館 であったと記憶します。日活系の映画を上映して、大変なものでした。特に二十歳前の女性連には全く新しい波で、大人気であったと思います。しかし、ここの持ち主が亡くなり、直ぐその後閉館したのではなかったでしょうか。持ち主の葬儀に、石原裕次郎 が来てると女の子が飛んで行ったことでした。小林明も来てたようなんですが、あまり言われませんでした。やっぱり 裕ちゃん でしょうか。

一番後に出来た映画館が一番先に潰れました。そして、その後、その場所は ローラースケート場 になりました。コンクリートの床の上をゴーゴーとローラースケートが回っておりました。珍しくてガラス越しに見入っておりましたが、それもそうそう長くは続きませんでした。ローラースケートもブームだったのでしょうけど、テレビが田舎の家庭にも入ってくる時代に成りかけておりました。そしてそのころから善通寺もさびれ始めました。皮肉なものです。

私が子供のころ、私をだしにして母がよく見ていた映画は 母子もの そして 化け猫もの でした。ほかに、片岡知恵蔵の 多羅尾伴内 とか 大川橋蔵 新吾十番勝負 など、みたように思いますが、とにかく嫌で嫌で仕方なかったのが 化け猫 でした。それも沢山あったようで、何回も見ております。そして後になるほど、突然化け猫が出現し、手で目を覆って見ないようにしていても、出ないだろうと思っっているといきなり現れ、それこそ私を恐怖に陥れました。それでも母が連れて行くのですから仕方ありません。母は手で目を覆っていたことを笑って父に話しておりました。なにか、それからものに怯えるようになったように思います。幼児期にあんなもの、見せちゃあいけません。

そんな中、新諸国物語 紅孔雀 は心踊りました。

ひゃらーり ひゃらりこ ひゃらーり ひゃらりこ どっこでふくのか ふしぎなふえだ

そんな歌だったのでしょうか。

そして、本当に怖くて泣き出してしまったものがあります。なにかの映画を見終わった後の予告編でした。白黒で映し出された画面一杯の ゴジラ でありました。本当に怖い思いで泣き出してしまいました。どうしてでしょう。とにかく怖かったことを覚えております。

後 富士見座 第二富士見座 オリオン座 とありますが オリオン座は 当時の言い方なら 洋画専門館で、第二富士見座は 今で言う 二番館 であったように思います。それこそ、幼稚園へ行く前の記憶ですのではっきりしません。富士見座という名前は、建っていたところが 富士見町 だったからでしょうね、多分。ひょっこり今思い出しました。

もう何年来人の住まぬ古い家です

古い空き家の写真です。門柱は石で出来ていて、いかにも堅苦しそうです。門の向こうは棕櫚が植わっており、それを回り込むようにして、玄関に向かいます。玄関は左右に引いて開く板戸になっており、二段の式台を上がって直ぐ右に、書生用の3畳程の小部屋があり、左へ行くと広い座敷があってその家の主人が使うことになっております。古い家ですね。第十一師団の将校さんが使っていた家はこんな風でした。そして私は、実は...善通寺師団の師団長を勤めた方を存知上げておりました。自衛隊の師団長ではありません。陸軍の、です。

こんなこと書いていいのかなあ。



赤門の話です

善通寺の赤門です。門の前を、自転車を押した人が入ろうとしておりますが、その足元には小さな橋があります。下界と浄土を区切る三途の川です。一応寺には決まりのものですね。そしてその向こうを私たちは ガラン と呼び慣わしておりました。伽

藍 です。そこは、かつて縁日が立ち、露天や屋台が賑わって、夜にはカーバイトの火が一段と明るく回りを照らしておりました。子供心に、その明るさはびっくりするのに値しました。そしてまた、その独特の臭いにも。

屋台だけでなく、見世物小屋も二箇所ぐらい立っていました。あの独特の呼び込みと猥雑さは、子供には刺激が過ぎるものでした。 蛇女 ろくろっ首 ー そんなものを見た記憶があります。喉を絞ったしわがれ声で、また独特の節回しで客を呼び込みます。そして蛇女が蛇を喰いちぎってみせると、はだけた肩を衣装で包み、替わって呼び込みを続けます。

五重塔の側ではなく、大楠木の方でサーカスもかかっておりました。金網を張った球の中をオートバイがくるくと、縦にも横にも回転して見せます。マフラーを切ったオートバイは、割れるような爆音でありました。二台が水平に、追いかけ合うようにも回り、縦と横に交わるようにも回ります。そしてぶつかったりもしません。爆音と火の子に魅入られました。道化も猛獣も空中ブランコも。それが小さな小屋の中の世界でした。



そして外では、 ここから入っちゃいけないよ と、棒っ切れで線を引き、言葉巧みに客を集め、これも麻袋から蛇を出して這わせ、何や彼やと口上を述べ、何時の間にか蛇とは関係のない、訳の分からぬ薬を、さも安くしたように言って売りつけます。私も客が散ったあと、蛇の麻袋の横に置かれた枡の中に残っている 薬 という液体を額に塗り付けました。

これを つけると あたまが よくなる 子供心に、そうなんだろう か と思って。

瀬戸物も中年の女性を集めて、売り口上を言いながら値段を下げ、最後の方はにひやく を ふたひやく とか言い換えて売っておりました。

このひと じょうずなあ

おばさんの感心すること仕切りでした。そう言ったおばさんをチラリッと見、同じ口上を繰り返しておりました。

あの猥雑な喧騒と騒擾も、なんとなく危険な気配を身に付けた男たちや、どこか埒外に居ることを分からせる女たちも、カーボナイト・トーチ ランプが百ワットの裸電球に変わり、綿菓子やお面、空に浮かぶ風船、ブリキのピストルや車だけになって、見

なくなりました。大正、昭和初期の、なんでしょうね、妖しさ とでも言うのでしょうか、そんなものが消えてしまった気がします。

写真の、車が写っている辺りに、かつては何軒か店がありました。ちょうど車の当たりが氷屋さんで、平素は氷を配達したりしていた筈ですが、人の集まる縁日とか日曜日には アイスクャンディ を売っておりました。10種類くらいあったと思いますが、私のお気に入りはお小豆でした。チョコレートもミルクもオレンジも食べたことがなく、一番最初に食べたのが小豆で、以来ずうっと小豆でした。一本100円、今思うと高価なものでした。

門をはさんで反対側が鯉節屋さんで、ベルトの掛かった機械を回し、いつも鯉節を削っておりました。私たちからその手元は見えません。モーターが回り、薄いひらひらしたものが箱に溜まっていきます。それが珍しくて、私は長い時間見ておりました。しかし、その鯉節は高く、母は買ったことがありませんでした。



ついでに 伽藍のことを述べておきます。夏、ここで盆踊りがあったはずですが、ここだったと、私は思っていますが、記憶違いかもしれません。夜、蒸し暑い中、子供は私一人だったせいか、母は男の子の私に、近所の女の子と同様に浴衣を着せ、盆踊りを見にきました。私には暑くて、ごわごわと糊の効いた布地は肌に痛く、また歩き難いばかりでした。

しかし、歌というものは不思議なものです。当時、なんとか音頭というのを作るのが流行っていて、善通寺も 善通寺温度 というものを作りました。ですから、炭鉾節 と 善通寺音頭 が繰り返し掛かっておりました。

その出だしは思い出せませんが、

きな一よ よりなよ おいでなよ ほんまに一ええとこ ぜんつうじ ぜんつうじ

だいし しとおて かすみのなあかを むすめへんろの すずがあ なる

きまあせ よりまあせ かいだんめぐうり ……

メロディを思い出し、歌詞も順序はめちゃくちゃですが、こんな風なところまでは思い出しました。

暑い中を、女の子の**ちゃんと一緒にやと得心して着た浴衣ではありませんでしたが、次第に飽きてきて、しかし汚してはいけないと、じっと我慢しておりました。

下の写真は、赤門から見た 赤門筋 商店街 です。そして、以前書いた 犬が子猫を庇ってくるくると回っていた現場が、写真のマンホールの辺りでした。写真だけを見ると、随分整備されて清潔そうな町並みに見えますね。写真の向うの方から電車を降りて、善通寺への参拝客やら買い物客やらがこの通りを歩いておりました。今は、他の地方都市と変わりなく、人も通らず、店もシャッターを降ろし、綺麗に整備された歩道と車道だけの町になりました。この通りを少し離れたスーパーマーケットはとても賑わっているのですけどねえ。



かつて、この町に、 土日デー というのがありました。それは大変な賑わいでした。町も不夜城のような明るさで、夜店、金魚掬い、ヨーヨー釣り、そのようなものが店の前に並び、人が行き交っておりました。昼間、トラックを止め、その荷台で子供だけの ラムネ の早や飲み競争をやっており、母親に押され、若い衆さんに手を引っ張られ、私もその荷台に乗りました。引っ込み事案のわたしがです。ラムネのビンの頭に栓を叩く木片をセットし、ヨーイドンで蜜柑箱の上のビンの栓を抜き、急いで飲み始めます。しかし、焦ってビンのお尻を高くすると中のビー玉が落ちて来てまた栓をしてしまいます。私はラムネにむせそうになりながら、またビー玉の頭をたたき、やっと飲み終わりました。口の周りは、甘ったるいラムネでびちょびちょでした。3位だったと思います。 惜しかったあ、父と母の弁でありました。あの時の賞品は何だったのでしょうか。私は3位だったので貰えませんでした。

ちょっとレトロな、小さな洋館です

ほんとにレトロな、小さな洋館作りです。次が、この建物と繋がった和風家屋です。これが善通寺の遊郭跡の一つです。当時としては、他には見ない最高に贅を尽くしたものではなかったでしょうか。



以前にも丸亀の遊郭のことを記しましたが、今でもこういったものが残っております。本当にひっそりと身を隠すようにたたずんでおります。そして、今の人はこちらを見て見ない振りをします。まるで 不都合な真実 のように。しかしこれは私達の過去 です。過去を今の倫理観で裁くことに、私は違和感を感じます。今の価値観で過去 を振り返れば直ちに 過ち に見えそうですが、その時の倫理観では違った判断ではなかったでしょうか。ですから薄っぺらな否定はしてはならないと思っています。

しかし今、私達は長い時間と共にそれを否定する価値観を得ました。過去を揉み消すのではなく、声高にこれを喧伝することも必要ありません。しかし、なかったことにし

てはならないと思います。そうしなければ 過去 に 過ち が無くなって
しまいます。先の戦争についても、そして 靖国神社 のことでも、戦後生まれの私
には 知らないこと であるかもしれませんが、あの 白熱教室 で議論されて
た通り、私達は 過去 について重く受けとめなければならないと思います。私は
護国神社の万燈夏祭りには、父に代わって必ず参りますし、靖国神社については、昭和
天皇の それが私の心だ というお言葉を深く心に刻んでおります。忘れっぽい日本
人ではいけないと思っています。



特に下の写真の飾りなんか、私は好きなんですが、どうでしょうか。



勝手に善通寺芸術祭 2

香川県の島嶼部を中心に、いま瀬戸内国際芸術祭2016が開かれています。たくさんの人たちが、詫間港やら丸亀港、高松などから船に乗り、出かけてゆくようです。しかし、地元民はそれほど関心がありません。他所から来た人には、瀬戸内の、それも香川県沖の島々は、まるで海の箱庭のようで美しいかもしれませんが、地元民にとっては、それは日常見飽きたものなんですから。

それに便乗してか、岡山市も岡山芸術祭と銘打って、何かやっているようです。それもいいです。また、海だけでなく、山でも山間芸術祭をどこかでやってみました。善通寺は、そんなことから置いてけぼりです。お遍路さんを見かけるだけの毎日です。

しかし、善通寺芸術祭を勝手に開催しようと思い立ちました。この町は、道すがらにアートがあるんです。



町の自転車屋さんの油絵です。上手に展示してあります。



草生した中に、電柱に隠れるように置かれた大甕ですが、もう何年になりますか、女の人がひとりでやっていた路地裏の民芸品店の前に置かれた、たぶん大谷焼の水がめです。お店のシャッターが閉まったままになった後、半年か一ち年ほどは店の外灯がついていました。センサーで夕方になると勝手に点いていたのだと思います。それももう点りません。水がめも置かれたままです。これもアートだと思います。